

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32629

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730662

研究課題名(和文) 1945～70年の少女少女雑誌文化における異性愛主義の拡大に関する研究

研究課題名(英文) the research on expansion of heterosexuality principle in the culture of the boy's and girl's magazines from 1945 to 70

研究代表者

今田 絵里香 (IMADA, ERIKA)

成蹊大学・文学部・講師

研究者番号：50536589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後の『少女の友』『女学生の友』の小説と読者通信欄を分析し、両雑誌に異性愛文化が導入される際の論理とそれがもたらした影響を明らかにするものである。分析によると、両雑誌は1955年以降異性愛文化を導入することがわかった。そして『少女の友』ではエス(少女同士の親密な関係)から異性愛へ、センチメンタルから明朗へ、少女小説から少女マンガへ価値が転換し、前者が否定され後者が肯定されることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes the readers' correspondence columns and novels carried in the magazines "Shojo no Tomo" and "Jogakusei no Tomo" in post-war Japan and clarifies the logic at the introduction of heterosexual culture in both magazines and the influence that this had. The analysis reveals that both magazines brought in heterosexual culture after 1955. With "Shojo no Tomo," our analysis made clear that there was a change from "S" (intimate relationships between young girls) to heterosexual love, from sentimentality to cheerfulness, from novels for young girls to comics for young girls, and that in this shift in values they denied the former and affirmed the latter of each of these.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教育社会学

キーワード：異性愛 少女少女雑誌 男女共学 ジェンダー メディア

1. 研究開始当初の背景

1966年、学歴獲得水準は人種によって大きな偏りがあることが、コールマンによって報告された。この報告は全世界に大きな影響を及ぼした。というのも、それまで人々は、学校こそ属性による差別をなくし、不平等な社会を平等な社会に変革していく機関であると信じてきたからである。このような考え方はパーソンズを代表とする機能主義理論の論者によって一大勢力を築いてきた。しかし、コールマンの報告はそれに異議を唱えるものであった。学校は社会的な差別構造をなくすどころかむしろ作り出している、と。これ以降、学校を不平等の再生産装置とみなす葛藤理論が台頭し、人種・階級・ジェンダーの不平等を作り出す学校システムが明るみに出されてきた。「ジェンダーと教育」研究はこのような理論の潮流のなかに位置づけられる。ただし、日本の「ジェンダーと教育」研究は充分に行われてきたとはいえない。1960年代のアメリカを中心とした第2波フェミニズム、それによってもたらされた1970年代の日本における「ウーマン・リブ」を経て、1980年前後に「女性学」という学問領域が生まれる。このような時代背景のなかで「ジェンダーと教育」研究は1990年代中頃ようやく産声を上げた。したがってまだ十分な蓄積はない。とくに歴史的な研究は不十分といわざるを得ない。一方、教育史には女子教育史の蓄積があるが、葛藤理論の流れを汲む「ジェンダーと教育」研究の視点で行われた研究は非常に少ない。むしろ女子教育史では長らく機能主義的な捉え方が主流であり、たとえば「戦前日本の女子が学校教育を享受するということ」は肯定的に捉えられる傾向があった。しかし、「ジェンダーと教育」研究はそういった素朴な捉え方を否定するものである。したがって「ジェンダーと教育」の歴史研究は、学校教育そのものにジェンダー不平等を再生産するシステムがあることを明らかにし、それがどのようにして生み出されたかを問うものでなければならない。申請者は、戦前日本における都市新中間層の「子ども」「少年」「少女」の捉え方を明らかにしてきた。先行研究によるとこの都市新中間層は女子を高等女学校に通わせる教育熱心な階層であるとされている。しかし、それは一方的に「進歩的」と捉えられるものではない。都市新中間層のまなざしには、「学歴獲得を目指す教育を与える『少年』」と「学歴獲得を目指す教養主義的な教育を与える『少女』」という枠組みが存在しており、この枠組みによって、都市新中間層女子は、職業訓練を受ける下層女子よりもかえって職業獲得に失敗し、結婚して良妻賢母になることを余儀なくされているのである。教育が男女平等にとって促進要因にも阻害要因にもなり得るといふ、複雑なありようがそこには存在する。このような研究は、「ジェンダーと教育」研究の流れを汲む歴史研究として

位置づけられ、本研究もそのような視点によって研究を行うものである。

2. 研究の目的

申請者はこれまで戦前日本の「少年」「少女」というカテゴリーとその内実を明らかにしてきた。主に少年少女雑誌文化によって創出され、意味を与えられた「少年」「少女」というカテゴリーは、都市新中間層の男子・女子を表象する記号として用いられてきた。先行研究によると、この都市新中間層の男子・女子は、大人たちによって近代家族的な「子ども」として捉えられ、愛護と教育を与えられる存在として捉えられていたといわれている。しかし先行研究ではその「子ども」にジェンダーによる差異があるとはみなしてこなかった。申請者はそれに疑問を投げ掛け、その「子ども」が大人たちによってジェンダー化された「少年」「少女」として捉えられていたことを明らかにした。さらに、その「少年」はもともと男女を含意するものであったこと、そしてそこからジェンダー化された「少年」「少女」が生み出され、「少年らしさ」と「少女らしさ」が異なるものとして位置づけられていったことを解き明かした。また「少女らしさ」が時代とともに変化していったことも明らかにした(今田絵里香『「少女」の社会史』勁草書房、2007年)。

本研究では、戦後になってその「少年」「少女」というカテゴリーがどのように扱われていくのか、「少年らしさ」「少女らしさ」がどのように変化するのか、そのカテゴリーを創出した少年少女雑誌文化を分析することで、明らかにしていきたい。子どもを巡るジェンダー秩序は戦後になると大きく変容する。その代表的なものが男女共学の実施である。この男女共学の実施を背景として、少年少女雑誌文化は異性愛主義の文化を誕生させ、蔓延させていく。このような少年少女雑誌の変化は、「少年らしさ」「少女らしさ」を急激に変化させていくと思われる。果たして少年少女雑誌に生まれた異性愛主義の文化は、どのようにしてこれまでの「少年らしさ」「少女らしさ」を揺さぶり、変革を迫っていくのであろうか。そしてそれはどのようにして戦後のジェンダー秩序に組み込まれていくのであろうか。戦後ジェンダー秩序に組み込まれていった異性愛主義を少年/少女らしさという視点から捉え、また、少年/少女らしさを異性愛関係/同性同士の親密な関係という「親密な関係性」から捉えることで、戦後日本における子どものジェンダー秩序を明らかにしていきたい。また、異性愛主義の文化が蔓延する戦後日本の少年少女雑誌文化が、日本特殊なものなのかどうか、欧米の少年少女雑誌文化と比較し、明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

(1) 歴史研究においてもっとも重要な作業は史料の収集である。初年度以降、国立国会図書館・国立国際子ども図書館・大阪府立国際児童文学館（大阪府立図書館に移転予定）・日本近代文学館・神奈川近代文学館・東京都立多摩図書館で、戦後日本の少年少女雑誌の関連記事を複写し、収集する。少女雑誌では代表的な少女雑誌として『少女の友』（実業之日本社）・『少女クラブ』（講談社）・『ひまわり』（ひまわり社）・『ジュニアそれいゆ』（同）・『女学生の友』（小学館）・『少女ブック』（集英社）・『少女』（光文社）の関連記事を収集する。少年雑誌では『日本少年』（実業之日本社。戦前に休刊する）・『少年クラブ』（講談社）の関連記事を収集する。このような少年少女雑誌の異性愛を扱う記事を収集するとともに、編集者・執筆・読者の異性愛に関する意向が示されている記事を収集する。このような史料収集を実施するとともに、関連する文献を収集する。

(2) 次年度以降、国内で文献収集及び史料収集を行ったが、その作業によって得られた少年少女文化（少年少女雑誌を中心とする文化）の特徴を捉えるため、平成 23 年度以降は他国の少年少女文化との比較を実施する。比較するのは、あらゆる国のなかでもっとも少年少女文化の歴史があり、もっとも研究の盛んなイギリスである。イギリスは古くは『ナルニア国物語』シリーズ、最近では『ハリー・ポッター』シリーズが生み出されたことが示すように、世界のなかでも少年少女文化、とりわけ児童文学・少年少女文学が生産・消費・研究されている国であるといえる。したがって、イギリスで少年少女雑誌、及び少年少女文学の単行本を収集する。また、少年少女文化に関する文献を収集する。

4. 研究成果

1945～1970 年の間、戦前に創刊された『少女の友』と、戦後に創刊された『女学生の友』の掲載小説を分析すると、どちらも 1955、56 年から、異性愛関係を描写する小説が増加することが明らかになった。とりわけ『女学生の友』は増加の傾向が著しく、1970 年にはほとんどの小説が異性愛関係を描写するものとなった。次に、同期間の『少女の友』通信欄を分析し、異性愛導入の論理とその影響について調べたところ、1952 年まではボーイ・フレンドとエスの相手について語る投書が溢れていたが、1952 年を過ぎる頃から、エスの相手について語る投書は見られなくなることがわかった。そして、通信欄では、エスはセンチメンタルなものとして意味づけられており、1952 年以降、否定されていった。一方、異性愛は明朗なものとして意味づけられており、一貫して称揚されていた。また、『少女の友』の形式上の変化を見ると、1950

年以降、明朗小説というジャンルが形成され、1954 年以降、ストーリーマンガが掲載されるようになることがわかった。出版社の違いについて見ると、『少女の友』を刊行していた実業之日本社は、戦前より一貫して少女雑誌文化の核に文芸とセンチメンタリズムを据えており、少女マンガにも明朗なものにもその導入には慎重な姿勢を示していた。異性愛導入にも慎重であった。一方『女学生の友』を刊行していた小学館もまた、教育と学習を看板にしていたことから、少女マンガにも異性愛を取り入れることにも消極的だったのである。しかし、1956 年以降、講談社との攻防戦にコストがかさんだことから、小学館はマンガを取り入れることとなった。また、『女学生の友』は異性愛を取り入れる戦略を取った。そして、1958 年以降のミッチー・ブームに乗って、異性愛文化を徐々に拡大させていくことになった。これによって小学館も『女学生の友』も躍進していったのである。

このような分析結果をどのように解釈することができるだろうか。『少女の友』においては、1956 年以降、異性愛文化が導入されるとともに、他のさまざまな変化が引き起こされていった。すなわち、エスから異性愛へ、センチメンタルから明朗へ、少女小説から少女マンガへ、という方向に価値の転換がなされていったのである。そして、それらはなんの関連もなく引き起こされていったわけではなく、相互に強く結びつきながら転換の道を辿っていった。すなわち、異性愛は明朗さと結びつけられ、ともに肯定される。それとともに、エスとセンチメンタルさは分かち難いものであるとされ、ともに否定される。同時に、エスを培養し、センチメンタルさを演出するのは戦前型の少女小説であると捉えられ、批判されるのである。他方で、明朗というありようは盛んに称揚され、明朗小説というジャンルが形成される。また、明朗さと結びつく少女マンガが人気を得るのである。

このような転換は、戦後、子どものジェンダー秩序が大きく変化するなかで、戦前型「少女らしさ」が戦後型「少女らしさ」に大きく変わっていったと見ることができる。すなわち、詩集を抱えてエスの相手を想う少女より、マンガを読んで、ボーイ・フレンドとともに明るく毎日を過ごす少女のほうが、「少女らしい」と捉えられるようになったのである。先行研究のなかにはエスは同性愛として異常視されていったと捉えるものもある。しかし、戦後の『少女の友』を見る限り、エスはセクシュアリティとして捉えられて異常視されていったというより、むしろ、ジェンダーとして捉えられて批判されていったと考えられる。すなわち、「少女らしさ」の一つとして捉えられ、戦後の少女にはふさわしくない「少女らしさ」として排除されていったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

今田 絵里香、「少女」になる 少女雑誌における読むこと/見ること/書くことをめぐって、ユリイカ、青土社、査読無、第45巻16号、2013、178 - 186
今田 絵里香、戦後日本の『少女の友』『女学生の友』における異性愛文化の導入とその論理 小説と読者通信欄の分析、大阪国際児童文学館紀要、大阪国際児童文学館、査読有、第24号、2011、1 - 14

〔学会発表〕(計5件)

今田 絵里香、少年少女雑誌における書くこと/読むことをどのようにとらえるか、日本教育社会学会第65回大会課題研究3「文学的想像力と社会的想像力」、埼玉大学、2013
今田 絵里香、作文・綴方教育と少年少女雑誌文化、日本教育社会学会第64回大会テーマ部会2「学校文化の歴史社会学」、同志社大学、2012
今田 絵里香、学校文化と少年少女雑誌文化、シンポジウム「学校文化の源流 近代日本の「学び」の風景」、学習院大学、2012
IMADA, Erika, The Image of Boys and Girls in Modern Japan and Korea, 2011 International Conference "Imaging Asia through Cultural Production and Consumption", ソウル大学(韓国), 2011
今田 絵里香、男女共学と少女雑誌における異性愛表象、教育史学会第55回大会コロキウム5「男女別学から男女共学へ セクシュアリティと男女交際」、京都大学、2011

6. 研究組織

(1)研究代表者

今田 絵里香 (IMADA, Erika)
成蹊大学・文学部・講師
研究者番号：50536589